

# 丁子からの手紙



藤 田 汎 子

丁子から手紙がきた。「先生、五月八日は小学校生活最後の運動会です。私達は最高学年としていろいろな役割につき、小学校生活最後の運動会を成功させたいと話合っているんです。先生、時間があつたら是非、見に来てくださいね。待っています」

彼女は、海辺の町にある幼稚園に勤務した折、一年保育で入園してきた。生まれると同時に母親に死別し、兄二人と父親の中で、病弱な祖母に育てられ、何をすることも手をかしてやらないとできないほど、生活経験の乏しい子でした。そのひ弱な彼女が、今、小学校最後の運動会を友達と力を合わせて成功させようと頑張っている。何か身体の中から熱いものがわき上ってくるように感じました。

当日はよく晴れ、正に五月晴れのさわやかな運動会日和。私は木陰から、一生懸命子供達の走りまわる姿を目で追いました。あ、O男だ、M子もH美もT也もS夫もいるノ大きくくなったな。動きまわる顔の片隅に、あのころのあどけなさ、かわいらしさがそのまま残っている。多勢の中から知った顔を見つけたら、まるで恋人の姿でも見つけたように、胸が躍った。

マスメールの準備で、全六年生が入場前に集まってきた時、丁子を見つけた。小さかった彼女は、見上げるほど背が伸び、前から二番目にならんで見た。小さい方はかりさがしていたのでとそっと声をかけると、げげんそうなる表情で見つめかえした。まわりに居た

子供達も同様に。「丁子ちゃん、はら、ばら組の時の…」と言うと、急に顔面一杯に笑みもどりと、「あー先生ノわあー先生来てくれたの。あ、じゃあみんなのこと集めっから」係の先生の手前もあつて制止したが、すばやくとんでいって、当時のクラスの子供達を十五人六人集めてきた。昨年母親をなくしたT也、甘えん坊だったC男、双子のY子とN子、きかん坊だったM子I子などなど。

「先生、私のこと覚えてる？」「廊下に立ってなつて言われて泣いちゃったっけな。」「あれ？何でそんなこと言われた？」「Mちゃんとぶざけとして走ったから、ねえ」とM子に同意を求め、「マラソン苦しかった」「工作やつてて手ががしちやっただ」「ほらーノ集まれノ」係の先生のメガホンが鳴って散っていった。時間があつたらどんな話が飛び出したらろう。

私は、子供は、幼稚園のころのことなど、ほとんど忘れていたのだからと思つていた。しかしそれは、本当に自分よがりの考えであつたことに気がき木槌で強くなされたようなショックさえ覚えた。たった一年間だけの、あの幼稚園生活を、あんなに鮮やかに覚えているとは。徐々に過去が鮮明に、目の前に映し出された。

家庭の温かさの中にとっぷりとつかつていた子や、保育園で二年、一年とすごしてきた子など、さまざまな経験をしてきた子供達に、なるだけ二年保

育年長組のレベルまで引き上げようと焦つてた。ハサミも扱えない子、衣服の着脱も満足にできない子、スキップもできない子、そんな子供達に、私は次々難題も、苦しい課題も教えていった。しかし彼等は、園生活に親しみ苦しい課題を一つ一つ克服して、集団のきまりや必要な技能を身につけていった。そんな中で丁子はやはり、他の子より遅れがちで、友達と遊ぶよりは私にまとわりつき、なかなか生活習慣も自立できずにいた。そして私自身も母親のいないハンデを、私にまとわりつくことで満たしている彼女を容認していたように思う。そんな丁子が、生き生きとして友達先頭になり活躍している姿は本当に驚くばかりでした。

幾日かして、また丁子から手紙がきた。「運動会には来てくれてありがとう。とっても嬉しかった。本当は来てくれないと思つていたの。先生変わっちゃったつて、みんな言つてたよ。今度みんなで先生の家に行こうつて言つてただけど、いいですか。返事下さい」私にはまた、楽しみが増えた。彼等の成長を確められる楽しさと同時に彼等のイメージをこわしはしないか不安でもある。いつまでも彼等の理想をうらぎらない。先生でありたいと考えさせられた丁子からの手紙でした。

(いわき市立江名幼稚園教諭)